

論文

成人の知識・能力のジェンダー格差

— 知識・能力の性差の顕在化と、性別内・性別間分化の実態 —

岡田 典子¹⁾

キーワード：ジェンダー、学力、知識・能力、性別内分化、性別間分化

要旨：能力は、理念上、個人が培ってきたものであり、平等に評価されていると考えられているが、実際は社会的・文化的に構造化されており、この構造化の原理の一つに「ジェンダー」がある。本稿は、1997年に広島大学教育学部教育社会学研究室が行った調査データに基づき、中学時代の学業成績と成人後の知識・能力を比較し、ジェンダーの視点からその実態を明らかにしたものである。分析の結果、「クーリング・アウトされる女性の知識・能力」、性別内分化の視点から「女性で拡大する知識・能力の性別内格差」、性別間分化の視点から「高学歴層で縮小する知識・能力の男女格差」という3点が明らかとなった。この実態について概念図を用いて考察し、社会的な背景を探る。

1. はじめに

2018年8月、ある大学医学部の入学試験で女子や浪人回数が多い受験生の得点操作を行って合格者数を抑制していた入試不正問題が発覚した。これを契機に文部科学省は医学部医学科がある全国81大学を調査し、同年12月、複数の大学で不適切入試が行われた、またはその可能性が高いとする最終報告を出した。女子に不利な得点調整を行っていたことについては、女性医師は結婚や出産を機に長時間労働を避ける傾向が強く、「年齢を重ねると医師としてのアクティビティが下がる¹⁾」ことや、外科系の診療科で女性医師の比率が低いといった診療科の男女偏在が、その理由のようである。つまり、女性医師を取り巻く労働環境や制度、背景にある意識といった根本的な問題の解決を目指すのではなく、選抜の段階で「女性だから」という理由で不公正に合格者数を抑制することで、結果として進学機会や能力発揮の機会が制限されたということであり、これは、個人の能力や業績によって社会的地位が配分される「メリトクラシー」の原則に反する。

能力は、理念上、個人が培ってきたものであり、なおかつ、平等に評価されていると考えられている。しかし、そういった他者からの評価には、たいてい不満がつきまとう。それは、私たちの能力が社会的・文化的に構造化されているからである。この構造化の原理の1つに、ジェンダー（社会的・文化的な性差）がある。

¹⁾ 山陽学園短期大学幼児教育学科

例えば、我が国の4年制大学進学率の男女差は縮小傾向にあるが、依然として男女差がある。2018(平成30)年の大学進学率は53.3%であり、これを男女別にみると、男性56.3%に対して女性は50.1%と男性のポイントが6.2%上回っている²⁾。当然のことながら、この男性の大学進学率の高さは、学力だけに起因するものではない。既に先行研究において、出身階層と学業成績が高校卒業後の進路選択に影響することは男女に共通する傾向である一方、女性は性役割観が鍵となって学業を重視しなくなる側面があり、学業成績による業績主義的進路選択が行われにくいことが実証されている(尾嶋2001、尾嶋2002、天野1988、中西1998等)。しかしながら、その進路選択の結果として、また進学や就労といった様々な経験の総体としての成人の知識・能力について、学業成績や学歴との関連を明らかにし、ジェンダーの視点から分析した研究はほとんどみられない。

学校時代の学業成績や成人段階の知識・能力に男女差はみられるのか。それは、学業成績や進路選択の結果として得られた教育機会(学歴)と関連があるのか。本稿では、調査時期が少々遡るが、広島大学教育学部教育社会学研究室が1999年7月に実施したアンケート調査の結果をもとに、実態とその背景を探っていく。調査対象及び調査方法、回答者の属性については、注に示す³⁾。分析に当たっては、SPSS Statistics 19を使用した。

2. 成人の知識・能力の性差

成人の知識や能力は、男女で違いがみられるのか。中学生段階と成人段階との2時点で比較すると、その在り様は変化しているのか。経時的に分析を行うこととする。

(1) 成人の知識・能力にみる性差－男性の高い自己評価－

最初に、成人段階の知識・能力の実態を男女別にみていく。

まず、成人の知識については、中学校で学習する社会科・理科・数学の基本的事項で構成する「中学程度の知識」と、調査を実施した1999年当時(本調査の場合、1998年1月から1999年4月まで)に新聞第一面で取りあげられ話題になった「時事的知識」の計24項目を設定し、これらについて「あなたはどの程度説明できますか」と尋ねた。回答は、各項目4段階で評定してもらい、「よく説明できる」4点、「少し説明できる」3点、「あまり説明できない」2点、「まったく説明できない」1点と得点化した。表1は、その平均値を男女別に算出したものであり、数値が高いほど理解度が高いことを示している。

表1をみると、成人の知識24項目のうち、男女で有意差が見られた項目は17項目であり、軒並み男性の理解度が高い。なかでも、「時事的知識」の法律や経済、国際情勢関連の項目で、その得点差が大きい。

次に、成人の能力については、いわゆる「実力」と呼ばれる「訓練や経験の結果、現実に到達した能力」(岩田1988、pp.117-120)に限定し、日常生活を送る上で必要とされるレベルで能力を捉えることを試みた。この日常生活上の諸能力として、基礎的事項である「3R's」、文章読解能力、文章作成能力、論理的表現力などの「言語能力」、機器を操作する「機器操作能力」、日常生活上の諸問題を主体的に解決するための「問題解決能力」の4領域の計15項目を設定し、「日頃の生活で、次のことがどの程度できますか」と尋ねた⁴⁾。回答は、各項目4段階で評定してもらい、「よくできる」4点、「少しできる」3点、「少しにがて」2点、「とてもにがて」1点と得点化した。表2は、その平均値を男女別に算出し

たものであり、数値が高いほど能力が高いということになる。

表2をみると、成人の能力15項目のうち9項目で有意な男女差が生じており、いずれも男性の能力が高い。なかでも、「機器操作能力」の男女差は顕著である。また、「言語能力」の「公の場で、人の前に立ってスピーチをする」「新聞の第一面に載っている記事の内容を理解する」や「問題解決能力」の「問題解決に向けて、具体的な対策をたてて実行する」でも男女の得点差は大きい。

表1 成人の知識（性別）

		男性		女性		F値	
		平均値	SD	平均値	SD		
中学程度 の知識	社会系						
	非核三原則	△ 3.10	0.83	2.60	0.98	23.62	***
	三権分立	△ 3.12	0.87	2.72	0.98	11.27	***
	OPEC	2.58	0.94	▼ 2.08	0.89	6.65	***
	モンスーン	2.72	0.91	▼ 2.38	0.99	7.43	***
	ペリー来航	2.94	0.83	2.87	0.84	0.71	
理数系 の知識	源頼朝	2.72	0.96	2.71	0.98	0.40	
	リトマス紙	△ 3.17	0.76	△ 3.14	0.68	4.41	
	日食	△ 3.20	0.77	△ 3.03	0.82	1.86	*
	融点と沸点	△ 3.00	0.90	2.75	0.93	7.19	**
	動脈と静脈	△ 3.24	0.76	△ 3.09	0.79	1.82	*
	三平方の定理（ピタゴラスの定理）	2.71	1.05	▼ 2.31	1.01	1.20	***
時事的 知識	円すいの体積の求め方	2.78	1.07	2.60	1.08	0.09	
	コソボ空爆	2.87	0.79	▼ 2.33	0.84	13.77	***
	通貨「ユーロ」	△ 3.03	0.76	▼ 2.48	0.88	36.35	***
	クローン技術	△ 2.96	0.75	2.75	0.78	4.94	***
	改正男女雇用機会均等法	△ 3.04	0.73	2.82	0.81	6.19	***
	不良債権	△ 3.12	0.78	2.61	0.88	12.95	***
	ダイオキシン	△ 3.10	0.70	△ 3.03	0.69	4.20	
	テポドン	△ 2.98	0.90	▼ 2.37	0.97	28.20	***
	臓器移植	△ 3.10	0.70	△ 3.06	0.70	2.04	
	ガイドライン法	2.55	0.91	▼ 2.06	0.86	5.93	***
	コンピュータ2000年問題	△ 3.18	0.78	2.68	0.90	10.34	***
	環境ホルモン	2.67	0.86	2.70	0.83	1.45	
IOC五輪招致疑惑	2.88	0.80	2.64	0.93	15.75	***	

平均値が3.0を超えるものには△を、2.5を下回る項目には▼を示している。

t検定 ***p<.001, **p<.01, *p<.05

表2 成人の能力（性別）

		男性		女性		F値	
		平均値	SD	平均値	SD		
3R's	漢字を読む	△ 3.21	0.69	△ 3.19	0.63	2.82	
	漢字を書く	2.74	0.81	2.75	0.76	1.84	
	簡単な計算をする	△ 3.34	0.65	△ 3.15	0.75	0.01	***
言語能力	ひとつのまとまった文章を書く	2.81	0.84	2.65	0.89	5.51	*
	改まったあいさつ状を書く	▼ 2.42	0.91	▼ 2.41	0.90	0.07	
	長い文章を読んで、要点をまとめる	2.71	0.82	2.57	0.90	6.41	
	公の場で、人の前に立ってスピーチをする	▼ 2.38	0.97	▼ 2.01	0.94	3.72	***
	カタカナ語（外来語）の意味を理解する	2.61	0.81	▼ 2.43	0.82	0.21	***
	道をたずねた外国人に、英語で教える	▼ 1.94	0.92	▼ 1.72	0.90	0.50	**
機器操作 能力	新聞の第一面に載っている記事の内容を理解する	△ 3.18	0.72	2.66	0.80	6.93	***
	ワープロやパソコンで文章を作る	2.87	1.09	▼ 2.25	1.13	10.25	***
問題解決 能力	説明書を見ながら、ビデオの接続をする	△ 3.14	0.93	▼ 2.15	1.00	3.83	***
	問題解決に向けて、具体的な対策をたてて実行する	2.95	0.85	▼ 2.52	0.80	2.94	***
	自分の意欲や関心を常に高めようとする	△ 2.99	0.79	2.89	0.77	1.00	
	自分の生活に必要な情報を収集する	△ 3.06	0.70	△ 3.09	0.64	1.03	

平均値が3.0を超えるものには△を、2.5を下回る項目には▼を示している。

t検定 ***p<.001, **p<.01, *p<.05

(2) 中学校の成績と成人段階の知識・能力にみる性差－性差の顕在化とクーリング・アウトされる女性の自己評価－

1) 成人男性の方が高い知識・能力

表3は、成人の知識（表1）と能力（表2）の各領域の項目を主成分分析により集約し、主成分得点の平均値を男女別に算出した結果を示したものである⁵⁾。表3より、成人の知識・能力には性差が歴然と存在しており、男性の知識・能力が高いことがわかる。その得点差は「機器操作能力」で最も大きく、「時事的知識」がそれに続く。

表3 成人の知識・能力の性差（主成分得点）

		男性		女性		F値	
		平均値	SD	平均値	SD		
知識	社会系知識	0.22	0.94	-0.17	1.02	4.12	***
	理数系知識	0.15	0.97	-0.12	1.00	0.05	**
	時事的知識	0.29	0.96	-0.23	0.97	0.10	***
能力	3R's	0.07	1.02	-0.05	0.98	3.27	
	言語能力	0.17	0.98	-0.13	0.99	0.56	***
	機器操作能力	0.47	0.88	-0.36	0.94	5.17	***
	問題解決能力	0.14	1.05	-0.11	0.94	0.49	**

t検定 ***p<.001, **p<.01, *p<.05

2) 成人段階で顕在化する知識・能力の性差

では、成人段階で確認された知識・能力の性差は、中学校時点ではどうだったのか。中学時代の知識・能力の程度を示す「中学時代の成績」を指標として確認していく。

表4のクロス集計は、「中学校3年生の頃、あなたの成績は、学年の中でどのくらいでしたか」という質問に5段階で回答してもらった結果である。あくまでも主観的な自己評価ではあるが、男性で「中より下の方」「下の方」と回答した人の割合がやや多いことから、女性の方が相対的に成績上位であった傾向がうかがえる。また、表中の平均値は、「中学時代の成績」を「上の方」5点から「下の方」1点までそれぞれ得点化して算出したものである。クロス集計で見られた男女の有意差は、平均値を比較した場合は確認できなかった。

この表4の結果を、先に示した表3の結果と突き合わせてみると、重要な示唆が得られる。中学時代の成績ではさほど顕著ではなかった男女の学力差が（表4のクロス集計では、

表4 中学時代の成績の性差

		男性	女性	
中学時代の成績	ク	32.3	30.0	*
	ロ	23.5	29.4	
	ス	26.3	31.0	
	集	12.0	5.6	
	計	6.0	4.0	
	%	100.0	100.0	
		合計		
	平均値	3.6	3.8	
	SD	1.2	1.1	
	F値		9.66	

χ^2 検定、t検定 ***p<.001, **p<.01, *p<.05

表5 成績、知識・能力と性別との相関

		性別	
中学時代の成績		-0.051	
知識	社会系知識	0.191	***
	理数系知識	0.133	**
	時事的知識	0.258	***
能力	3R's	0.056	
	言語能力	0.149	***
	機器操作能力	0.408	***
	問題解決能力	0.123	**

***p<.001, **p<.01, *p<.05

むしろ女性の成績が男性より上位の傾向であった)、成人の段階になると顕在化し、男性の知識・能力が女性より高くなっているのである。この実態については、「性別 (男性=1、女性=0 のダミー変数)」と「中学時代の成績」「成人の知識・能力」との相関を確認した場合も同様である (表 5)。表 5 をみると、「中学時代の成績」と「性別」の間では有意ではない相関が、成人の段階になると、「3R's」を除いた「知識・能力」と「性別」の間で有意な相関が確認できる。

3) クーリング・アウトされる女性の自己評価

もう少し、中学時代の成績と成人の知識・能力との関連を確認しておきたい。

表 6 は、中学時代の成績の違いによる成人の知識・能力の在り様を性別ごとと検討するために、分散分析を行った結果である。分析にあたっては、5 段階で回答を得た「中学時代の成績」の変数を「上位」「中位」「下位」の 3 段階にカテゴリー化して使用した。(「上位」は 5 段階回答の「上の方」「中より上の方」、「中位」は「中くらい」、「下位」は「中より下の方」「下の方」)。

表 6 中学時代の成績別に見た成人の知識・能力

		中学時代の成績													
		男性						女性							
		上位	中位	下位	F 値	上・中	上・下	中・下	上位	中位	下位	F 値	上・中	上・下	中・下
知識	社会系知識	0.51	-0.01	-0.45	22.04	***	*	***	0.19	-0.63	-1.00	37.07	***	***	
	理数系知識	0.40	-0.15	-0.23	11.38	***	***		0.18	-0.50	-0.75	23.65	***	***	
	時事的知識	0.48	0.12	-0.06	6.44	*	**		0.02	-0.40	-1.20	25.70	***	***	***
能力	3R's	0.42	-0.28	-0.53	22.91	***	***		0.17	-0.31	-0.50	12.47	***	***	
	言語能力	0.54	-0.17	-0.40	25.52	***	***		0.15	-0.42	-0.85	22.37	***	***	
	機器操作能力	0.65	0.25	0.24	6.44	**	*		-0.28	-0.41	-0.63	2.16			
	問題解決能力	0.36	-0.03	-0.28	7.60	*	***		0.07	-0.24	-0.69	10.68	*	***	*

***p<.001, **p<.01, *p<.05

表 6 より、男女に共通して、中学時代の成績が上位であった人は成人の知識・能力が高く、その差が維持されている。成人の知識・能力は、中学時代の成績を基点として展開していることがわかる。

ところが、その在り様、つまり、中学時代の成績別にみた成人の知識・能力の得点は、男女で大きく異なっている。中学時代の成績は同程度であったとしても、成人段階での知識・能力は総じて男性の方が高く、女性の知識・能力が頭打ちになっている。これが、クーリング・アウト (冷却現象) である。

3. 性別内分化と性別間分化—学歴・学校歴の視点で—

それでは、女性の知識・能力のクーリング・アウトという現象は、女性に一樣に見られるものなのか。「ポスト学歴社会」「脱学歴社会」などと言われて久しいが、学歴や学校歴が知識・能力達成に強い影響を及ぼすことは先行研究からも明らかであり、ここにジェンダーの視点を加えてその関連を検討することは重要である。よって以下では、学歴と学校歴に焦点を当て、知識・能力の性別内分化と性別間分化の実態を検討することとする⁶⁾。

(1) 学歴・学校歴による性別内分化－女性に特徴的な二極分化－

分析に当たっては、本人の学歴を「中学卒」「高校卒」「短大卒」「大学卒」に分類した。「短大卒」には高専卒と専修学校卒、「大学卒」には大学院卒がそれぞれ含まれている。なお、「中学卒」はサンプル数が少なく（n=12）、本稿での分析からは除外した⁷⁾。また、本調査では、学歴と併せて「最後に通った学校名」についても回答を得ている。この記述に基づき、大学卒を「威信の高い大学」卒（旧帝国大・旧官立大卒、早稲田大・慶応大など有名私立大卒）と「その他の国公私立大学」卒とに分類し、大学卒の学校歴分析を行った。

表 7-1 及び表 7-2 は、本人の「学歴」及び大学卒の「学校歴」による知識・能力の実態を性別ごとに検討するために、男性・女性それぞれに成人の知識・能力の主成分得点の平均値を比較した結果である。なお、調査を実施した 1999(平成 11)年の大学進学率は 38.2% であり、男女別にみると、男性 46.5% に対して女性は 29.4% と 17.1% の開きがある⁸⁾。

まず、男女ともに共通する点として、学歴別の得点をみると、いずれの知識・能力も「大学卒」の得点が高く、正の値となっている。「高校卒」と「大学卒」の得点差が最も大きい項目は、「言語能力」である。また、大学卒に限定して学校歴別の得点をみると、「威信の高い大学」出身者の得点がいずれも高く、大学卒のなかでも知識・能力の格差が確認できる。いわゆる「タテの学歴」だけでなく、「ヨコの学歴」といわれる学校歴によっても、知識・能力に格差が生じているのである。

次に、性別で異なる点として、知識・能力の学歴間格差や大学卒の学校歴間格差は、概

表 7-1 学歴・学校歴別にみた知識・能力の性別内分化（男性）

		学歴				学校歴（大学卒）						
		高校卒	短大卒	大学卒	F 値	高卒 短卒	短卒 大卒	高卒 大卒	その他 国公私 立大卒	威信の 高い 大学卒	F 値	
知識	社会系知識	-0.16	0.43	0.50	15.53		*	***	0.39	0.77	0.02	*
	理数系知識	-0.18	0.34	0.41	11.06		*	***	0.28	0.69	0.03	*
	時事的知識	0.03	0.43	0.48	6.24			**	0.31	0.87	0.00	**
能力	3R's	-0.27	0.16	0.39	12.48			***	0.29	0.68	0.04	*
	言語能力	-0.17	0.26	0.53	16.35			***	0.41	0.92	1.87	**
	機器操作能力	0.29	0.65	0.65	5.37			**	0.59	0.84	1.39	
	問題解決能力	-0.04	0.19	0.38	4.84			**	0.32	0.60	1.93	

***p<.001, **p<.01, *p<.05

表 7-2 学歴・学校歴別にみた知識・能力の性別内分化（女性）

		学歴				学校歴（大学卒）						
		高校卒	短大卒	大学卒	F 値	高卒 短卒	短卒 大卒	高卒 大卒	その他 国公私 立大卒	威信の 高い 大学卒	F 値	
知識	社会系知識	-0.49	-0.23	0.47	22.38			***	0.39	0.68	4.42	
	理数系知識	-0.33	-0.18	0.38	11.79			***	0.21	0.82	0.25	*
	時事的知識	-0.31	-0.32	0.08	4.44		*	*	-0.08	0.51	0.00	**
能力	3R's	-0.28	-0.07	0.48	14.87			***	0.32	0.91	0.35	*
	言語能力	-0.49	-0.13	0.55	28.08	**		***	0.31	1.23	0.66	***
	機器操作能力	-0.61	-0.33	0.04	11.45	*		***	-0.11	0.45	1.04	**
	問題解決能力	-0.32	-0.13	0.33	11.34	*	**	***	0.10	0.97	0.06	**

***p<.001, **p<.01, *p<.05

して女性に大きく表れている。とりわけ、「言語能力」の女性内の得点差は大きい（高校卒と大学卒との得点差は男性 0.71 に対して女性は 1.04、威信の高い大学卒との得点差は男性 1.09 に対して女性は 1.72 である）。この結果は、学歴や学校歴による女性の性別内分化が進みやすいことを示唆している。

なお、学歴による知識・能力の性別内分化を考えるにあたって、「短大卒」の得点に注目しておきたい⁹⁾。短大卒男性の得点はいずれも正の値で、大学卒男性の得点に近い傾向を示しているのに対し、女性短大卒の得点はいずれも負の値で、大学卒女性よりも高校卒女性の得点に近く、なかには高校卒男性の得点よりも低い項目もみられる。一元配置分散分析の多重比較の結果をみても、女性はすべての知識・能力において「大学卒」と「短大卒」との間に有意差があり、大学卒女性の得点が突出している。男性と女性で「短大卒」の位置がかなり異なっていることがわかる¹⁰⁾。

(2)学歴・学校歴による性別間分化—高学歴・高威信で性差縮小—

ここで、少し視点を変えてみる。表 3 で成人の知識・能力を性別との関連で検討したところ、いずれの知識・能力も男性の方が高かった。では、同じ学歴や学校歴である場合、知識・能力に有意な性差が生じているのだろうか。表 8 は、同一学歴、同一学校歴ごとに知識・能力の性差を分析した結果である。

表 8 性別に見た成人の知識・能力（学歴、大卒者の学校歴別）

		学歴別									学校歴別（大学卒のみ）									
		高校卒			短大卒			大学卒			その他国公立大卒			威信の高い大学卒						
		男性	女性	F 値	男性	女性	F 値	男性	女性	F 値	男性	女性	F 値	男性	女性	F 値				
知識	社会系知識	-0.16	-0.49	0.10	*	0.43	-0.23	3.89	**	0.50	0.47	0.50	0.39	0.39	0.15	0.77	0.68	3.85		
	理数系知識	-0.18	-0.33	1.34		0.34	-0.18	1.51	*	0.41	0.38	0.12	0.28	0.21	0.08	0.69	0.82	0.73		
	時事的知識	0.03	-0.31	0.57	*	0.43	-0.32	1.31	***	0.48	0.08	2.21	**	0.31	-0.08	1.52	*	0.87	0.51	0.87
能力	3R's	-0.27	-0.28	0.32		0.16	-0.07	0.01		0.39	0.48	0.01		0.29	0.32	0.01		0.68	0.91	0.35
	言語能力	-0.17	-0.49	1.90	**	0.26	-0.13	0.64		0.53	0.55	0.38		0.41	0.31	2.05		0.92	1.23	0.69
	機器操作能力	0.29	-0.61	0.83	***	0.65	-0.33	3.91	***	0.65	0.04	0.19	***	0.59	-0.11	0.01	***	0.84	0.45	0.13
	問題解決能力	-0.04	-0.32	0.97	*	0.19	-0.13	4.07		0.38	0.33	3.14		0.32	0.10	7.07		0.60	0.97	0.50

***p<.001, **p<.01, *p<.05

表 8 をみると、「高校卒」や「短大卒」と比較して、「大学卒」は有意な性差がみられた知識・能力の項目が少ない。さらに、大学卒を学校歴別にみると、「威信の高い大学卒」では知識・能力に有意な性差は全く確認できなかった。つまり、進路選択の結果としての学歴や学校歴と、成人段階での知識・能力の性差の表れ方と深い関連があることがわかる。

4. 成人の知識・能力にみられるジェンダー格差の背景

以上の分析から、「クーリング・アウトされる女性の知識・能力」、性別内分化の視点から「女性で拡大する知識・能力の性別内格差」、性別間分化の視点から「高学歴層で縮小する知識・能力の男女格差」の 3 点が明らかとなった。これらの分析結果を概念図として示

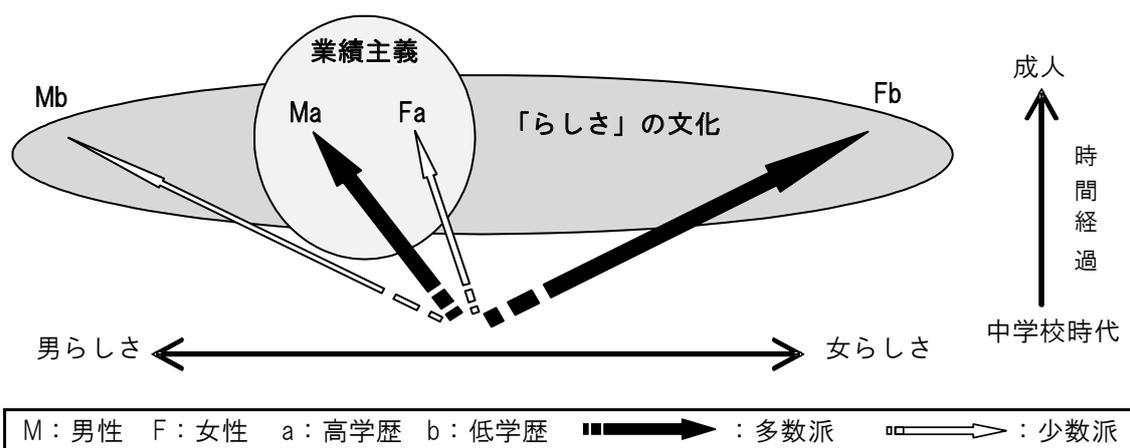


図1 成人の知識・能力のジェンダー格差（概念図）

したものが、図1である。なお、図中の「高学歴」「低学歴」の「高」「低」については、調査を実施した1999（平成11）年の大学進学率が男性46.5%、女性29.4%であり、それ以前の大学進学率の男女差はさらに大きいことから、あくまでも相対的に男性は「高学歴」の割合が、女性は「低学歴」の割合が高いと捉えて図示したものであり、知識・能力の高低ではない。

では、なぜ図1のような実態が生じているのか。成人の知識・能力の男女格差の在り様からその背景を探ることとする。なお、本稿では、男女格差の在り様を把握することを目的としているため、t検定や分散分析を用いて平均値の相違を分析した結果に基づいて考察を行った。規定要因の分析については、拙稿（2003）に掲載しているので参照されたい。

(1) クーリング・アウトされる女性の知識・能力(Ma/Fb)

最初に、図1に太い矢印で示した男女それぞれの多数派であるMa（男性・高学歴）とFb（女性・低学歴）に注目する。

分析結果から、中学時代の成績で見られた女性の学業成績の高さが、その後の過程で頭打ちとなり、成人の段階では男性の知識・能力が相対的に高くなっていることが明らかになった。この結果は、1つに、学歴段階が進むにつれて女性に強化される「性の二重規範」、もう1つに、知識・能力の習得機会がジェンダーによって構造化されていることが背景にあると考えられる。

まず、学校教育段階において、より高い学業成績を奨励するという「知識・能力重視」の価値観と同時に、女性の場合、いわゆる「女性らしさ」を重視する価値観の獲得が奨励される。この「性の二重規範」の浸透により、女性の進路は業績主義と性役割を規準に分化することになり、結果として、女性は業績主義の世界から排除されていく¹¹⁾。次に、中学校卒業後に人々が直面する社会は、大学や短大への進学率や専攻分野、就労形態の男女差に表れているように、ジェンダーによって構造化されている。つまり、知識・能力の習得機会は性別により不均衡であり、その後の社会的地位や知識・能力といった社会的資源の配分を規定しており、これが知識・能力のジェンダー格差に繋がっているのである。

このように、女性に強化される性の二重規範によって、女性は業績主義社会に参入する

段階で「足をひっぱられた」状態となり、さらに、知識・能力の習得機会がジェンダーによって構造化されているため、その状態が維持され、強化される。この結果、女性の知識・能力がクーリング・アウトされ、中学校時代と成人段階の2時点間で男女の知識・能力の高低が逆転するという現象を生んでいるのである。

(2) 女性でより大きい知識・能力の性別内格差 ($Ma - Mb < Fa - Fb$)

次に、Fa (女性・高学歴) と Fb (女性・低学歴)、Ma (男性・高学歴) と Mb (男性・低学歴) それぞれの矢印の開きに注目する。

成人の知識・能力の性別内格差が女性の方がより大きいという結果は、教育段階においては「学歴」、労働市場においては「職業」を通して、女性に対してスクリーニング (選抜) がより強く機能していることに起因すると考えられる。先述したように、調査を実施した1999 (平成11) 年の大学進学率は、男性46.5%に対して女性は29.4%と17.1%の開きがあり、それ以前の大学進学率の男女差はさらに大きい。女性の大学進学率が男性より低いという状況は、女性全体における大学卒女性の選抜度の高さを示している。また、職業選択や就労形態をみると、女性は男性以上に学歴により明確に分離している。つまり、女性は就学・就業のプロセスで男性より「足をひっぱられている」と同様に、一層「ふるい」にかけられているのである。このスクリーニング機能の結果、女性の知識・能力の性別内格差がより大きくなるのである。

(3) 高学歴層で縮小する知識・能力の男女格差 ($Ma - Fa < Mb - Fb$)

今度は、Ma (男性・高学歴) と Fa (女性・高学歴)、Mb (男性・低学歴) と Fb (女性・低学歴) それぞれの矢印の開きに注目する。

Ma と Fa の開きは小さく、Mb と Fb の開きは大きい。高校卒で顕著な知識・能力の性差は高学歴者ほど縮小し、威信の高い大学卒では見られないという分析結果より、成人の知識・能力の性差はどの学歴段階でも同様に見られる傾向ではないのである。

全体社会の新たな特徴として、業績主義の終焉との認識 (言説) がある一方で、対象者の認識 (意識や経験) は学歴や学校歴が知識・能力の獲得と関連している。そのため、「らしさ」のような別の価値観を持ち込むことは歓迎されない。業績主義を基軸とした社会で高い評価を勝ち取るためには、男女問わず高学歴を獲得し、その後も常に達成意欲を加熟し続けなければならない。ただし、業績主義と「男性らしさ」はいまだ強固に結びついているために、性の二重規範が浸透する女性にとって業績主義の世界への参入は、言うならば「男性化」するしかない。すなわち、高学歴層は業績主義という同一の価値観に向かって「同化」し、その一方で、低学歴層は「らしさ」という価値観と業績主義の間で「分化」するため、高学歴層ほど知識・能力の男女格差が縮小すると考えられる。

(4) 成人の知識・能力のジェンダー格差が意味すること

ここまで、成人の知識・能力を性別との関連で分析し、その背景を考察してきたが、最後に、こうした知見の意義を確認しておきたい。

まず、成人の知識・能力を「男性集団」「女性集団」という大きな枠で捉えることは、依然として重要である。本稿の冒頭で述べたように、個人によって培われ、平等に評価さ

れているはずの能力を「性別」という変数で分析してみると、男女に大きな差がある。このことは繰り返し検証されるべき問題であり、ここでも強調しておきたい点である。

ところが、実態はそれほど単純ではないことも見逃してはならない。「男性集団」「女性集団」というものの見方は、あくまでも「人間全体」というものの見方との対比において重要である。しかし、「男性集団」「女性集団」の内部には多様な層が存在している。このことは、ジェンダー研究において、性別内分化、性別間分化として議論されてきた問題であり、ジェンダー問題を「男性集団と女性集団」という二項対立の図式に単純化することを避ける重要な視点なのである¹²⁾。

それでは、業績主義の理念が前面に押し出されながらも、その内実はジェンダーによって構造化されているという社会は、そこで生きる個人にどのような意味を与えているのだろうか。最後に、概念図についてももう少し解釈を加えることにする。

集団は、たいていの場合、ある規準によりその内部で「多数派」と「少数派」に分けられる。図1の概念図で示したように、男性の多数派は、「高学歴」を必要とする「業績主義」の競争のなかに身を置く。これに対し、女性の多数派は、性の二重規範が作用した結果、業績主義の競争原理が持ち込まれない「らしさ」の文化に身を置く。この多数派と少数派について、その差異と関連をそれぞれ述べてみたい。

1) 多数派と少数派の差異

① 数の論理の表と裏

数の論理が働く状況では、多数派は優勢に立ち、少数派は劣勢に立たされる。しかし、こうした優勢と劣勢の姿は、個々の当事者たちのリアリティや周囲のまなざしには全く別のものに映るかもしれない。すなわち、少数派は少数であるがゆえに「目立った存在」に、多数派は多数であるがゆえに「埋もれた存在」に映るかもしれない。

② 内部の差異の競争

多数派と少数派との違いに加えて、多数派と少数派それぞれの内部のあり方にも注目しておく。多数派は、構成する人々が多いために様々な分化が起こるが、それだけに、わずかな差異をめぐって競争を繰り返す。一方、少数派は、構成する人々が少ないために分化の度合いは少ないが、それだけに大きな逆転劇がおこる可能性があるといえる。

2) 多数派と少数派の関連

① 「業績」から「らしさ」へ

複雑な現実を過度に単純化して捉えることの危うさは考慮しなければならないが、多くの男性は業績主義の世界に身を置き、そこで生き残ることを「勝ち」と考えるだろう。しかし、もし男性がその世界から身を引くなら、その場合は少数派となり、「負け組」と非難されるかもしれない¹³⁾。ところが、女性が業績の世界から身を引く場合はどうだろうか。少数派から多数派へと移動するために、その肯否は別として、男性ほどの非難を浴びせられることはなく、容認されることになるだろう。

② 「業績」世界の女性

男性の場合は、「業績」の世界と「らしさ」の世界が強く結びついているために、「業績」の世界にいても「らしさ」との両立がそれほど困難ではない。しかし、女性の場合、「業績」

と「らしさ」の両立はそれほど容易ではない。女性が「業績」の世界で生き抜こうとすれば、「女らしさがない」と見做されたり、「らしさ」を要求されることで葛藤を起こしたりするのである。

5. おわりに

繰り返しになるが、成人の知識・能力を性別との関連で分析した結果、「クーリング・アウトされる女性の知識・能力」、性別内分化の視点から「女性で拡大する知識・能力の性別内格差」、性別間分化の視点から「高学歴層で縮小する知識・能力の男女格差」という3つの現象が明らかとなった。

女性の知識・能力が男性より低いという分析結果は、能力主義の風潮が支配的な企業社会において、配属や処遇のジェンダー格差が生じるのはやむを得ないという性差別の正当化にもつながりかねない。しかし、この現象の背景には、女性をクーリング・アウトに導く「性の二重規範」と「知識・能力の習得機会のジェンダー格差」、「女性でより強いスクリーニング機能」、「知識・能力重視の一元的価値観」を重視する社会があり、そこには「業績」や「らしさ」といった様々な要素が重なり合うなかで生きる人々の複雑な現実があることを忘れてはならない。

そして現在、調査を実施した1999(平成11)年から20年が経過した。冒頭に記したように、我が国の大学進学率(過年度高卒者等を含む)は38.2%から56.3%に上昇し、依然として男性の大学進学率が女性を上回っているものの、その男女差は17.1%から6.2%に縮小した。一方で、OECD加盟国では、1990年代の高等教育重視への政策的転換によって女性の高等教育進学者が増加した結果、2016年では、日本とトルコを除いて女性の大学型高等教育機関進学率が男性のそれを上回っている¹⁴⁾。また、「男子の学業不振(学力低下)」も課題となっており、直近のPISA調査等の国際学力調査において、ほとんどすべての参加国で低学力層に男子が目立つこと、平均して男子の学習時間が短く、学習意欲も低いことが指摘されている(伊藤2017、多賀2018等)。さらには、就業率や雇用形態などの就業状況は男女ともに変化しており、若者の働く目的をみても、2000(平成12)年頃を境に「自分の能力をためず(10.0%)」が減少傾向にある一方で、「楽しい生活をしたい(41.1%)」が高い水準を維持している¹⁵⁾。翻って、こういった事象を分析対象とするジェンダー研究においては、男性/女性を二項対立的に捉えたり、抑圧者/被抑圧者と単純に捉えたりすることでは説明できない事象が報告され、性別内の多様性や格差の実態が明らかにされている(橋本2007、土田2008等)。こういった教育や就業を取り巻く構造の変化や実態を読み解く視点の変化が、人々の現実にとどのように反映するのかを明らかにしていくことは、今後の重要な課題になるであろう。

最後に、短期大学で教鞭をとる者として、次の2点について述べておきたい。

まず1つは、表7-2に示したように、短大卒女性と大学卒女性の知識・能力の差が極めて大きく、男性のその在り様とは異なっていた。高学歴化するなかで学歴が地位達成の必要条件としての重要性を増大しているという指摘(沖津1998、p.150)に基づくならば、個人の社会的評価は大学卒、なかでも威信の高い大学出身者を基準に序列化されている。しかし、この学歴や学校歴の獲得の過程で進路選択や教育機会のジェンダー格差が生じており、卒業後の就労構造をみても同様である。こういったジェンダー化された社会構造を

反映し、選抜度の高い大学卒女性との比較で短大卒女性の社会的評価がなされ、短大卒女性自身はそれをひな型として自己を評価する。

橋本（2007）は、階級・階層構成から格差拡大の構造を明らかにするなかで、格差拡大は機会の平等を損ない社会全体に悪影響を及ぼすことと併せて、ロールズ（Rawles, J.）の論を用いて「もっとも重要な基本財」としての自尊の意義を無視するものであるとし、すべての人びとに対して「自尊（または自尊の社会的基礎）」が配分されなければならないと述べている（pp.38）。ジェンダーによって不平等かつ不公正に構造化されている教育における格差も同様で、格差を生み出す構造を問うことと同時に、その克服に向けて、授業や課外活動を通して、学生の自尊感情や自己肯定感を高める実践に意図的・計画的に取り組む必要があると考える。

2点目は、表8の「短大卒」の知識・能力の男女差について、3R'sや言語能力のほか、問題解決能力ではその有意差はみられなかった。この結果は、「大学卒」でも同様である。

この点を考察するにあたり、筆者が大学生を対象に学習成果とストレインの要因分析で得られた以下の3つの知見を参考にしたい（拙稿2015）。

- 1) 大学生に求められる学習成果は、知識・技能を蓄積（ストック）する力である「知識・技能」と、ものごとを遂行（パフォーマンス）する能力を示す「汎用的能力」で構成されていた¹⁶⁾。この「汎用的能力」は、本稿の「問題解決能力」の内容と同様の項目で構成されている。
- 2) これらを従属変数とする重回帰分析の結果、その規定要因は大きく異なっていた。「性別」は「知識・技能」に有意な影響を及ぼしており、男性の方が「知識・技能」が高いものの、「汎用的能力」へのそれは確認できなかった。
- 3) 規定要因分析の結果から、学習成果の分化の背景にはその人が身につけている基本的な姿勢である「ディスポジション（disposition：性向）」があると考えられる。「この先」の「長期的な展望をもって、義務的に付与された学生役割に応えながら蓄積を増やす」というディスポジションがある人は「知識・技能」の得点が高く、「その場その場で」で「短期の目標を設定し、独自の取り組み方で遂行する」というディスポジションがある人は「汎用的能力」の得点が高かった。

これらの知見を総合すると、「汎用的能力」は、性別に関係なく、目標設定の仕方と物事への取り組み方を指導し、支援する過程で高めることができると考えられる。例えば、拙稿（2015）では、「汎用的能力」の規定要因として「キャリア探索行動」が有意であった。つまり、興味がある仕事に関する情報を収集し、その仕事に就くにはどのように活動すればよいかを調べるといった「環境探索」や、自分の得意・不得意を考え、自分という人間やその生き方について考える「自己探索」といった「キャリア探索行動」を行っている人ほど、「汎用的能力」が高いのである。そうであるならば、キャリア探索の過程で学生の自己成長が促されるよう授業や厚生補導を通して指導することは、汎用的能力の形成に有効であり、「長期的な展望をもって知識・技能の蓄積を増やす」ことの重要性を認識することと併せて、一層の工夫や配慮を行う意義があるといえる。

注

1) 東京医科大学内部調査報告書（公表版）2018年8月6日、p.23.

2) e-Stat 学校基本調査年次統計 [総括表] 進学率の「大学 (学部) への進学率 (過年度高卒者等を含む)」
(<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>)

3) この調査は、1999年7月、広島市A区に在住する1,500名、東広島市に在住する1,000名の合計2,500名を対象に、郵送法により実施された。サンプリングは選挙人名簿をもとに、広島市A区については29の投票区から7投票区、東広島市については40の投票区から10投票区を選定し、各投票区の人口に応じて等間隔抽出を行った。投票区を選定にあたっては、広島市のベッドタウンとしての機能を持つ地区を優先した。なお、質問紙の分量や職業上の諸能力に関する質問項目を含むことなどの理由により、比較的有効回答が得にくい60歳を超える人についてはサンプリングの際に除外した。返送された有効回答数は580であり、有効回収率は23.2%であった。

今回のサンプルは女性が多く、男性253名(43.7%)、女性327名(56.4%)である。以下、回答者の属性等についてのクロス集計表(表9-1、表9-2)を示す。なお、回答者の「年齢」は、「20-35歳(共通一次後世代)」「36-50歳(高校進学率7割超世代)」「51-60歳(新制第一世代)」という3つの年齢区分に分類して示した。

表9-1 回答者の属性

	男性		女性		合計		
	n	%	n	%	n	%	
年齢	20-35歳	58	22.5	98	30.0	155	26.7
	36-50歳	111	44.3	133	40.7	245	42.2
	51-60歳	84	33.2	96	29.4	180	31.0
学歴	中学卒	9	3.6	3	0.9	12	2.1
	高校卒	100	39.5	123	37.6	223	38.4
	専修学校卒	11	4.3	31	9.5	42	7.2
	短大・高専卒	13	5.1	98	30.0	111	19.1
	大学卒	103	40.7	68	20.8	171	29.5
	大学院卒	17	6.7	2	0.6	19	3.3
	その他	0	0.0	1	0.3	1	0.2
職業	無回答	0	0.0	1	0.3	1	0.2
	農林水産業	1	0.4	0	0.0	1	0.2
	商工・サービス業	23	9.1	23	7.0	46	7.9
	自由業	6	2.4	2	0.6	8	1.4
	企業・団体などの役員	19	7.5	3	0.9	22	3.8
	企業・団体などの勤め人	135	53.4	59	18.0	194	33.4
	臨時・パート・アルバイト	2	0.8	67	20.5	69	11.9
	公務員	30	11.9	11	3.4	41	7.1
	学校などの教員	5	2.0	8	2.4	13	2.2
	専業主婦	0	0.0	105	32.1	105	18.1
	学生	8	3.2	9	2.8	17	2.9
	無職	9	3.6	20	6.1	29	5.0
	その他	10	4.0	14	4.3	24	4.1
無回答	5	2.0	6	1.8	11	1.9	
合計	253	100.0	327	100.0	580	100.0	

表9-2 回答者の属性 (大学卒のみ)

	男性		女性		合計		
	n	%	n	%	n	%	
学歴	威信の高い大学卒	35	29.2	18	25.7	53	27.9
	その他の国公立大学卒	83	69.2	52	74.3	135	71.1
	無回答	2	1.7	0	0.0	2	1.1
合計	120	100.0	70	100.0	190	100.0	

4) 本調査では、この4領域に加えて、地域生活に参加するために必要とされる「地域生活参加能力」(「町内会や地域の行事に積極的に参加する」「近所や地域の人とうまく付き合う」など4項目)と、日常的

に必要とされる「家事能力」（「計画的に生活費を使う」「洗濯表示を活用して、適切な方法で選択する」「簡単な繕い物をする」「食品の鮮度を見分ける」など 10 項目）についても調査しているが、本稿の分析では割愛する。

- 5) 成人の知識・能力を最小の変数に縮約し、単純化した上で知識・能力の実態を把握するために、表 1 及び表 2 の知識・能力の下位区分ごとに主成分分析を行い、主成分得点を抽出した。それぞれの固有値と寄与率は次のとおりである。＜成人の知識＞社会系知識：固有値 3.693、寄与率 61.6%、理数系知識：3.695、61.6%、時事的知識：6.221、51.8%。＜成人の能力＞3R's：1.945、64.8%、言語能力：4.035、57.6%、機器操作能力：1.535、76.7%、問題解決能力：2.124、70.8%。なお、分析結果の詳細は、拙稿（2003、pp.274-275）を参照されたい。
- 6) なお、本節の内容は、広島大学教育学部教育社会学研究室（2000）の筆者担当部分を加筆修正し、再構成したものである。
- 7) 参考までに、中学卒者（n=12）の知識・能力の得点は、次の通りである。＜成人の知識＞社会系知識：-0.59、理数系知識：-0.73、時事的知識：-0.45。＜成人の能力＞3R's：-1.28、言語能力：-1.16、機器操作能力：-0.60、問題解決能力：-1.19。
- 8) e-Stat 学校基本調査年次統計 [総括表] 進学率の「大学（学部）への進学率（過年度高卒者等を含む）」 (<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>)
- 9) 「短大卒」には高専卒と専修学校卒が含まれている。回答者に学歴を尋ねた際、「短大・高専」を選択肢として一纏めにしたため、短大卒と高専卒の正確な人数は把握できないが、最後に通った学校名の記述より高専卒男性は 3 名確認できた（高専卒女性は確認できなかった）。
- 10) 多重比較の結果をみると、男性の場合、「社会系知識」「理数系知識」は「大学卒」「短大卒」と「高校卒」との間に、その他の知識・能力については「大学卒」と「高校卒」との間で有意差がある。一方、女性の場合、「言語能力」「機器操作能力」は各学歴間で有意差があり、学歴によってかなり能力差がある。この他の知識・能力については、「大学卒」と「短大卒」「高校卒」との間に有意差があり、大学卒の知識・能力の高さが窺える。
- 11) 林（2007）は、高校生対象の調査において、女子の場合、中学 3 年生次の成績（5 段階の自己評価）の成績上位者ですら男子と比べて 4 年制大学への進学率が低いこと、また、男子は成績中下位でも 4 年制大学進学が最もメジャーな選択しであるのに対し、女子は成績により進学先が大きく分かれる傾向にあると指摘している。伊藤（2011）は、この中下位で急激に男女の格差が広がっている実態について、「女性には大学型高等教育は不要」という根深い社会意識にとらわれ続けているということだろう。」（p.45）と述べている。
- 12) 多賀（2016）は、「ジェンダーと教育」研究で女性の特徴を描き出そうとするがゆえに、業績主義的な価値を体現している男性を暗に「標準」とみなすことで、男性の多様性が等閑視されてしまうこと、男性が「性役割」期待を不本意に押し付けられることにともなう抑圧や困難といった「被害者性」が可視化されにくいことを指摘している。
- 13) この点については、私立男子高校でのフィールドワークから男子生徒の多様性を実証した土田（2008）や不平等の多元化について指摘した多賀（2018）の論考等を参照されたい。
- 14) OECD.stat database によると、2016 年に大学型高等教育機関に該当する Bachelor's or equivalent level (ISCED2011 Level 6) への進学した者の割合は、男性 53.4%に対して女性は 46.1%であり、男性が 7.3%上回っている。Dataset: Graduation rates, entry rates and average ages, Indicator: Entry rate(2016), Age: Total: All age groups

- 15) 公益財団法人日本生産性本部「新入社員「働くことの意識」調査」(平成30年度)
- 16) 学習成果を測定するために設定した20の指標を得点化し、因子分析を行った結果、2つの因子が抽出された。第1因子は、「的確に判断する力」「物事を論理的に考える力」「情報を正しく分析・活用する力」「情報を的確に収集する力」「自己成長を追求し続ける力」「協調して物事を遂行する力」等の指標で構成されており、「汎用的能力」と命名した。第2因子は、「幅広い分野の知識」「専門分野の知識や技能」「幅広い分野への知的関心」「将来の職業に関連する知識や技能」等の指標で構成されており、「知識・技能」と命名した。

主要参考・引用文献

- 天野正子 1988、『性と教育』研究の現代的課題—かくされた『領域』の接続『社会学評論』第39巻第3号、pp.266-283.
- デュリュニベラ,M.(中野知津訳) 1993、『娘の学校—性差の社会的再生産—』藤原書店.
- 古田和久 2016、「学業的自己概念の形成におけるジェンダーと学校環境の影響」日本教育学会『教育学研究』83巻1号、pp.13-25.
- 橋本健二 2007、「格差拡大とジェンダー—女性内部の格差拡大と貧困層の集積—」女性労働問題研究会編『女性労働研究51号 格差拡大に挑む』青木書店、pp.26-40.
- 林 未央 2007、「進路の男女差の実態とその規定要因」(Crump Working Paper Series 25)、東京大学大学経営・政策研究センター、http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/crump_wp_no25.pdf.
- 広島大学教育学部教育社会学研究室 2000、「成人の知識・能力に関する調査研究(1)—学歴との関連に着目して—」広島大学教育学部教育社会学研究室編『教育社会学研究室年報』第3号、pp.2-29.
- 伊佐夏美・知念 渉 2014、「理系科目における学力と意欲のジェンダー差」『日本労働研究雑誌』2014年7月号(No.648)pp.84-93.
- 伊藤公雄 2011、「大学型高等教育におけるジェンダー平等がもたらすもの」『IDE』2011年10月号、pp.42-46.
- 2017、「男子の学力低下問題をめぐって(特集 ジェンダーと科学の新しい取り組み)」『学術の動向』編集委員会『学術の動向』日本学術協力財団22巻11号、pp.34-38.
- 岩田龍子 1998、『学歴主義の発展構造』(増補改訂版)日本評論社.
- 古田和久 2016、「学業的自己概念の形成におけるジェンダーと学校環境の影響」『教育学研究』第83巻第1号、pp.13-25.
- 木村涼子 1999、『学校文化とジェンダー』勁草書房.
- 中西祐子 1998、『ジェンダー・トラック—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社.
- 尾嶋史章編 2001、『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房.
- 2002、「社会階層と進路形成の変容—90年代の変化を考える」『教育社会学研究』第70集、pp.125-142.
- 岡田典子 2003、「成人の知識・能力の分析」原田彰編『学力問題へのアプローチ—マイノリティと階層の視点から—』多賀出版.

- 2015、「大学生の学習成果とストレインの要因分析」岡山大学グローバル・パートナーズ、教育開発センター、言語教育センター、キャリア開発センター『大学教育研究紀要』第11号、pp.163-182.
- 沖津由紀 1998、「学校教育の効果－解題－」日本労働研究機構編『教育と能力開発』日本労働研究機構、pp.145-157.
- ロールズ,J. (川本隆史他訳) 2010、『正義論 (改訂版)』紀伊國屋書店。
- 多賀 太 2010、「ジェンダー化された「能力」の揺らぎと「男性問題」」本田由紀編『労働再審① 転換期の労働と<能力>』大月書店。
- 2016、『男子問題の時代？錯綜するジェンダーと教育のポリティクス』学文社。
- 2018、「「ジェンダーと教育」研究の新展開－不平等の多元化と視点の多様化のなかで」日本教育社会学会編『変容する社会と教育のゆくえ (教育社会学のフロンティア 2)』岩波書店、pp.145-165.
- 多賀 太・天童睦子 2013、「教育社会学におけるジェンダー研究の展開－フェミニズム・教育・ポストモダン－」『教育社会学研究』第93集、pp.119-150.
- 土田陽子 2008、「男の子の多様性を考える－周辺化されがちな男子生徒の存在に着目して」木村涼子・古久保さくら編『ジェンダーで考える教育の現在－フェミニズム教育学をめざして』解放出版社、pp.62-77.